

(こくさいか山口 2005年7→9月号掲載記事)

～IWC蔚山会議に出席して～

下関市総合政策部国際交流課
(釜山広域市派遣職員)
古川 力

2002年に下関で開催された「国際捕鯨委員会 (IWC)」の年次会合が、釜山の隣町、蔚山 (ウルサン) 市で5月27日から6月24日まで開催されました。加盟国57ヶ国、約800名の参加者 (蔚山市発表) によって、激しい議論が飛び交いました。

5月15日に下関で行われた「第4回日本伝統捕鯨地域サミット in 下関」において採択された「下関宣言」の発表のため、下関市も日本政府代表団の一員として出席の機会を得る事ができました。毎年日本人の心をやきもきさせる「総会」は6月20日から24日まで行われ、日本を中心とする捕鯨推進国と米英豪等の各国を中心とする反捕鯨刻国との間で激しい議論が交わされました。



IWC総会会議の様子



休息時に会議場の一角で取材に応じる
水産庁 森下漁業交渉官

会議の結末はといえば、ここ数年間の膠着状態から今回も抜け出すことはできませんでしたが、徐々にその状態も変化を見せ始めています。反捕鯨の国々の反対議論はもう理屈にならなくなっている、といったところでしょうか。

とはいえ、仮に商業捕鯨が再開したとしても、南氷洋捕鯨は採算が取れないというのが大方の見解のようですが、それでも将来の食糧資源の有効活用を目指してこつこつと真摯に取り組む、捕鯨推進国代表「ニッポン」の姿勢に感心させられた日々でした。

私は2002年の下関会議にボランティアとして参加したことがきっかけとなって、捕鯨に関して少し関心を持つようになったのですが、総会の会場に入れるなどは夢にも思っていなかったもので、とても貴重な経験をすることができました。会議の中身については報道その他でご周知のことと思いますが、今回は私が見た「韓国におけるクジラのふるさと」である蔚山についてレポートしようと思います。

★蔚山市とクジラ

蔚山広域市は釜山市の北約70kmに位置し、人口107万人、現代グループの大工場、造船所を中心とした企業城下町です。

私は下関市民として、日本における近代捕鯨の発祥地であり、商業捕鯨で栄えた山口県下関市が日本の捕鯨の「ふるさと」だと思っていますが、韓国では蔚山市が韓国での捕鯨の「ふるさと」です。日本と違って韓国は全国的に鯨食をしてきた訳ではありませんから、捕鯨に関する国民の捕らえ方が日本とは少し相違する部分がありますが、蔚山に来ると鯨料理を出すお店はたくさん存在します。無論現在商業捕鯨は存在しませんが、韓国では他の魚類と混同して網にかかったもの等が市場に出回るようです。当然、料理は非常に高価です。蔚山市と捕鯨の関係は非常に古く、8000年前に作られたとされる盤亀台（バングデ）岩刻画がその代表です。複数の種類のクジラの絵に加え、「捕鯨」の事実を証明する船や銚等までが描かれており、韓国の国宝に指定されている非常に貴重な資料が残っています。

いにしへの商業捕鯨水揚げ港、長生浦（チャンセンポ）地区において、捕鯨文化の継承、商業捕鯨の再開祈願のために始められた「蔚山クジラ祭り」が、本年度で11回目を迎えました。下関といえば「ふく」がシンボル、蔚山市は「クジラ」がシンボルマークです。市役所の職員がスーツの胸につけるバッジが可愛いクジラのキャラクターバッジなのにはびっくりさせられます。なるほどIWCを誘致した熱意が感じられます。また、この5月末には市民待望の「蔚山クジラ博物館」がその長生浦地区についてオープンしました。太古の資料を初めとしたクジラ関係の展示内容は非常に充実しており、たくさんのお客様で賑わっています。今後も話題を集めそうな施設です。

下関市は一昨年从这个「クジラ祭り」に参加しており、地元のPRはもとより、日韓の捕鯨文化の相互理解並びに将来の商業捕鯨再開を目指した両市の接点を暖めてきました。



国宝、盤亀台(バングデ)岩刻画
(左端はその一部)



5月末にオープンした長生浦クジラ博物館

★捕鯨に関する日韓関係

日本はIWCにおいて捕鯨推進派の中心国として奮闘中ですが、韓国ももちろん捕鯨推進派の一国です。考え方の違いもあり、日本の意見と必ずしも一致しない部分もあるようですが、蔚山会議を誘致することで、国宝の磐亀台岩刻画やクジラ祭りといった韓国の捕鯨文化を紹介し、世界にそのスタンスを知ってもらうことが重要と考えているようです。

今回の会合でも、日本海地域における目視調査を日韓の協力関係の下で開催する決議案が韓国から提出され、めでたく可決されました。

韓国で仕事をしている私としては、もっともっと協力関係を深めていって欲しいと願いたいところです。

★会議ボランティア

2002年の下関会議でも300人を超えるボランティアの活躍が会議の成功に大きく貢献しましたが、蔚山会議でも総勢250名のボランティアが各所に配置され、素晴らしい活躍が見られました。特に下関会議と違ったのは、英語ボランティアだけでなく、約40名の日本語ボランティアも配置され、多くの日本人関係者に歓迎されました。

語学レベルの高さに加え、「おもてなし」の上手な韓国。物怖じせず、笑顔でてきぱきと応対しておられる姿を見て、自分自身大変刺激を受けました。

今回の会議は捕鯨推進国にとって一部の進展を見せたものの、大きな収穫には至りませんでした。しかし、会議の運営面としては、蔚山会議は下関会議に引けをとらない、いや、それを上回る大成功を収めました。蔚山会議が各国の参加者にとって忘れがたい思い出になっただけでなく、ボランティア一人一人にも大切な思い出になったことと思います。

韓国の「クジラのふるさと」である都市として、今回のIWCをきっかけに蔚山市はこれから韓国における商業捕鯨再開の旗振り役を担っていくことでしょう。前の記事でも書きましたが私も両市のボランティア交流活動を通じて蔚山市にたくさんの友人ができました。

一時の盛り上がりだけでなく、「捕鯨」を土台として、今後、蔚山市、下関市において新たな交流の機会が増えてくれればと願っています。